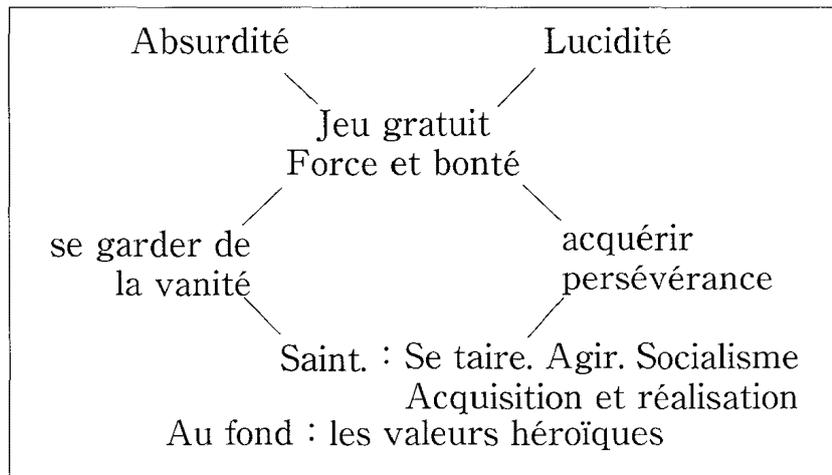


A. カミュの小説『ペスト』

平 田 重 和

『ペスト』の着想および執筆時期について

まず『ペスト』の構想時期の考察からはじめて見たい。小説『ペスト』の構想について年代順に見ると、一番古いのは、『カルネ I』¹⁾の1936年1月と日付のあるメモ書きの中に、不条理という語の対の語のように「聖者」という語がみられる。タルーの「聖性」に関連していると推測されるが、まだ「推測」の域は出ないと言っておいた方が無難かもしれない。



※右図 (Albert Camus : *Carnets I*. p.23)

1938年の12月と日付のあるメモには、決定稿でグランの別れた妻ということになるジャンヌという女性のことが記されている (決定稿では、このジャンヌは小説そのもののなかには登場しない)

次にほぼ『ペスト』の構想と思われるのは、『カルネ I』の1941年4月という日付のメモである。

「4月 第二の系列

悲劇の世界と反抗の精神——「ブジョヴィツエ」(3幕)²⁾

ペストあるいは冒険(小説)。

解放者ペスト

幸せな街。人々はそれぞれ違った暮らし方をしている。ペストはそうした生き方を一つにしてしまう。・・・街は閉鎖される。人々は堆積し、すし詰め
のなかで死ぬようなものだ³⁾。

1942年の『カルネⅡ』には「『異邦人』は、不条理に直面した人間の赤裸々な状態を描いている。『ペスト』は、同じ不条理に直面したさまざまな個人的観点の深奥の等価性を描き出している⁴⁾」という文言が見られる。『ペスト』の内容がかなり明確になってきたことが推測される。

そして、1943年には『ペスト』の初稿が完成する。この初稿の段階では、主人公リュール Rieux とタルー Tarrow は登場するが、グラン Grand やランベール Rambert はまだ姿を見せていない。38～39年の段階ではコレージュの教授という肩書きのステファン Stephan という人物のことが記されているが、この人物は決定稿では姿を消している。そのかわり初稿になかったグランやランベールが登場し決定稿でも定着しているわけである。ここで後の論述との関係で、すでにタルーという人物が姿を見せていることに注目しておこう。ということはタルーはモーリヤックとの論争に破れ「反省」したカミュが、自己の「告白」を言わせるためだけにあとから挿入(創造)された人物ではないということである。43年という段階ではまだモーリヤックとの論争はおこなわれていなかったわけだから。タルーは、リュールの記録に膨らみを持たせるために彼の「手帳」が機能するのだが、初期の段階ではこの「手帳」のためにタルーは存在し、そのためにカミュが関心をもち、最初から頭にあった人物である。カミュの「告白」の役目を果たすのはモーリヤックとの論争(1945年)以後にタルーの役割に付け加えられたものであろう。決定稿は47年の6月である。初稿が43年とすればほぼ4年の歳月がついやされていることになるし、36年の「聖者」をその

A. カミュの小説『ペスト』（平田）

萌芽と見れば「不条理期」の作品と同時並行してカミュの頭の中に『ペスト』が存在していたことになる。

41年および42年の『カルネ』のメモからも推測されるが、1955年1月11日付けのロラン・バルト宛ての手紙で、「『ペスト』は多彩な読み方をされることを私は望んだが、内容的に明らかなように、小説『ペスト』はヨーロッパレジスタンスのナチズムに対する闘争という意味を持っている」⁵⁾と述べている。「反抗」の問題は『シジフォスの神話』（以下『神話』と略す）にその萌芽を見るわけだが、その一つの発展としてレジスタンス運動をテーマにして構想されたことはほぼ間違いない。

前述したように41年という年は、ナチス・ドイツ軍がフランスを占領している時期で、カミュは本国で職を失い一時オランに在住したことはあるものの40年にアルジェから本国に渡って以来ほとんどをフランス本土で暮らし、つぶさに占領下の状況とレジスタンス運動の動向を見ていたことは確かな事実である。従ってこの状況をテーマに小説を書こうと意図したことは想像するに難くない。最初の構想はリユーを主人公に、オランの人々が、保健隊を結成し命がけで救援活動をした様を描くというものだったのだろう。そして事実、小説はそうなっていて、『ペスト』をレジスタンス運動と読み替えた読者は多数いただろうし、研究者のなかでもレジスタンス運動の寓話と解釈している人がいることも確かである。カミュが希望したようにこの小説は多面的な「読み」が可能だが、大きく分けて、レジスタンスの寓話という「読み」とペスト菌に代表されるような「一般的な悪」に対する反抗という「読み」と二つがあると言えるのではないだろうか。寓話としての「読み」は刊行当時、一般大衆から熱烈的な歓迎をもってむかえられたという事実をみてもこの小説がそうした「読み」を可能にするものであることはいうまでもない。

松本陽正氏は次のように述べている。「『ペスト』は、単にペストという疫病の物語としてだけではなく、当然ナチスを象徴するものとして読書されるべき書物である。このように『ペスト』を読めば、保健隊の活動はレジスタンスを

象徴していると考えられよう。確かに『ペスト』が、ルネ・レイノー⁶⁾等、カミュとレジスタンスを共にした仲間への鎮魂歌（強調筆者）の側面をもっていたのは事実である⁷⁾。松本氏は『ペスト』解釈の一つとして寓話の「読み」の可能性を示唆しただけで、寓話的な「読み」だけに固執しているわけではなくむしろ付加的に述べているのだが、ボーヴォワールのように知識人の中には寓話としての読みを厳しい評価をする人もいる。「ちょうどその頃、『ペスト』が出た。『異邦人』の調子はこの小説にも時折見出されたし、カミュの声は私たちを感動させた。しかし、占領の問題を悪疫になぞらえることは、やはり「歴史」と真の問題を回避する手段である⁸⁾。

ロラン・バルトは歴史の名において『ペスト』を批判した。主旨は「ペストはペスト以外の何物でもなく、レジスタンスは、レジスタンスそのものである⁹⁾」というように要約される。要するに、ペストは自然の悪であって、歴史的悪と混同することはできないということである。

キリスト教人格主義の立場に立つ批評家ピエール＝アンリ・シモンは次のようにいう。

要するに、カミュの場合にキリスト教に対するはなはだしい理解の不徹底さを示しているもの、このまじめで誠実なモラリストについてあえて言うならば、彼の思想のやや屈辱的な誤謬は、あたかも人間自体がもっている邪悪というものは存在せず、歴史上の混乱はすべて宿命に起因するかのようになり、災禍をつねに不幸にしてしまうやり方である¹⁰⁾。

P. ソディは『ペスト』刊行後、この作品が絶大な人気を得たことについて述べたあと、「ありふれた逆説であるが、彼は一般大衆の支持を得ると同時に知識人たちの支持を失ったのである¹¹⁾」と述べている。「知識人たちの支持を失った」というのは、先でみたボーヴォワールやロラン・バルトさらにはピエール＝アンリ・シモンのいうように、現実のレジスタンス運動の単純化にあるという意味のようだ。病原菌と現実の政治的悪とは勿論峻別しなければならないが、イデオロギーの対立が問題でなくなった現在、もう一度この作品を再

A. カミュの小説『ペスト』(平田)

検討する必要があるのではなからうか。

我々は、寓話的解釈を軽んずるものではないが、一般的な「読み」つまり、悪=死（生が善であれば、死は悪である）に対して、人間が連帯し、勝利を得る人間愛を描いた倫理的価値の高い作品であるとして、検討してみたい。この小説は悪に対して戦う人間のヒューマニスティックな作品であると一般的に評価されていることは周知のところである。このことは『ペスト』の思想的裏付けと目されている『反抗的人間』において、デカルトのラテン語 *Cogito ergo sum* で有名な *Je pense, donc je suis.* をもじった *Je pense, donc nous sommes.* (強調筆者) と個から集団の意識へと他者の存在が視野に入ってきたことでも確認される。

小説『ペスト』の粗筋はカミュ研究者でなくても文学ファンなら多くの人が、ある程度知っていると思われるが、論述の都合を考えて、最初にごく簡単に話しのないようを見ておこう。

194*年、アルジェリア第二の都市オランにペストが発生する。ねずみの死骸がいたるところで見られるというのがその前兆だった。医師リユーは市に対して即刻市門を閉鎖し外部との交流を遮断するよう申し入れるが、市側ははっきりした態度を示さない。そのうち市もリユーの意見を入れざるをえない状況になり、ペストの宣言をして、市門の閉鎖措置がとられる。ペストによる死者の数は瞬く間に増大し、医師や看護師の人手不足は目に見える状態になる。タルーは保健隊を組織することを提案し、リユーをトップにして防衛対策がとられる。それに参加するのは、パリからたまたまアラブ人の生活について取材にきていた新聞記者のランベール、イエズス会の神父パヌルー Paneloux、子供をペストでなくしたオトン Othon 判事、市役所の下級職員グランなどである。ペストは猛威をふるい保健隊のなかでも、タルー、パヌルー神父、オトン判事の子供、オトン判事などが死ぬ。しかしやがてペストは終息し、市門が開放されてオラン市は元の状態に回復する。リユーをトップにした保健隊の活躍の様

子が、主たるテーマである。

この小説は三人称で語られるが、実はこの語り手は、オラン市の惨状を記録にとどめておこうと決意した、医師リュウその人の個人的記録であったことが最後に明かされる。

『ペスト』の主要人物を、コタル・ランベール・グラン・タルーそしてリュウと見る人や、ランベール・リュウ・タルーとする人など解釈する人によって多少異なるが、我々はランベール・タルー・パヌルー神父・グラン・リュウを主人公として論述を進めてゆくことにする。

レジスタンスの歴史的現実には、レジスタンスの闘士はナチス・ドイツだけが敵ではなく、同国人であるフランス人対独協力者をも敵にしなければならない苦しい状況にあったが、『ペスト』では、コタルのような対独協力者を髣髴とさせる人物はいるものの、ほとんどすべての人が善意の人で「保健隊」に参加し、単一化されている。

ロベール・ド・リュベが、『神話』と『反抗的人間』とを対決させたとき、そこには著しい矛盾があるとしながらも、「しかし、『神話』以来一つの価値が保存されている。意識がそれである。いかなるときにも意識はその武器を自己に向けたりはしない。また最も有毒な自己の否定に至るまで自己に忠実であることを我々に示した。さらに言えば、意識は自己の全体を保持するためにしか破壊しない」¹²⁾と述べ、いわゆる「不条理期」の作品と『ペスト』に代表されるヒューマニズム時代との連続性を強調したが、作品の上では、「不条理期」から「反抗期」へとカミュは確かに変貌したように見える。しかし、アンガージュマンという視点から見ると、隠れていた要素が、表に出たという意味でも連続性があり、カミュは無頼派的ニヒリストからヒューマニストへ豹変したとは言えない。というのは拙論「A. カミュの『シジフォスの神話』再考」¹³⁾で見たように、『神話』のなかで「反抗」の思想がすでにあったからである。『ペスト』という作品は、そうした連続性の線上で受け取らねばならない作品であろう。異なった表情をしていたものがここで一挙に合流したのである。

主人公はリュウとその分身的存在のタルー、およびランベール、神父パヌル

A. カミュの小説『ペスト』(平田)

ーと「密かな不条理の英雄」グランの5人と見ていいだろう。そして神父パヌルーを除き他の4人が作者カミュの分身でもある。

小説『ペスト』の登場人物は、ペストとの遭遇によって、大きく変貌する人物と、そうでない人物、例えば、変貌を示す人物としては新聞記者ランベール、判事オトン、及び犯罪者コタールなど、またそうでない人物としては、医師リユー、タルー、パヌルー神父、及び市役所の吏員グランなどの二者に分けて考えられる。ただし、タルーについては、小説『ペスト』に登場する以前に、思想・心情の大変貌をしているのでどちらにも入れることができるが、小説『ペスト』に限っていうと、登場以来その姿勢は変わっていないので、変化しない人物の方へ入れた。さらに、パヌルー神父については変化したのか、しなかったのか正確に判定し難い部分もあって、最も異議の多い人物として考えられるが一応変化しない方へ入れた。

【ランベール】

ランベールはパリからアラブ人の悲惨な生活状態について調査するためオラン市にやってきた新聞記者である。その出張先でたまたまペストに会い、オラン市の市門が閉ざされたため、一種虜囚のような状態に置かれる。彼はこの状態から、脱出し恋人の待つパリへ帰りたい一心で、医師リユーに許可の願い出をするが、リユーはランベールの気持ちを理解するものの、立場上それを許可することはできない。ランベールは裏の世界、つまり密輸や密売の世界の男、コタール Cottard に相談し、助力を求めるが、このルートもそう簡単にことは運ばない。そうこうするうちにタルーから保健隊へ入り協力することを求められる。彼は脱出する計画をタルーにも打ち明け、この計画を進めながら、という条件で保健隊へ協力することを約束する。しかし、いざ脱出の可能性が現実のものとなり、いよいよそのチャンスが訪れた時に、「ひとりで幸福になる」¹⁴⁾ ことは恥ずかしいとして、ペストの街オランに留まることにする。そして以後彼は、ペストがおさまりオランの街の市門が開放されるまで、保健隊の一員として勇敢に活躍する。このランベールの変化とその後の活躍は感動的である。

ところで、ランベールはカミュ初期の個の幸福を貫く人物として規定することができるのではなかろうか。カミュ初期「不条理期」の作品はもっぱら個の幸福が関心の中心だったと言っても過言ではない。『結婚』、『異邦人』、『幸福な死』、『神話』は個の幸せを叙述したものであった。『結婚』の著者は「幸福であることを恥じることはない」¹⁵⁾と宣言していた。初期の「幸福の哲学」と言えば、『裏と表』や『結婚』のことだが、同時に『異邦人』の「哲学」でもある。『異邦人』第一部のムルソーは風来坊のような生き方をしているが、第二部の最後、つまり小説の最後で「僕のはじめて、世界の優しい無関心に心をひらいた。これほど世界を自分に近いものと感じ、自分の兄弟のように感じると、僕は幸福だったし、今もなお幸福であることを悟った」¹⁶⁾と言って小説は終わる。『異邦人』のムルソーは処刑を目前に控えて自分の人生を振り返り、自分が幸せだったことを確認しているし、『神話』で描かれる人間は「意識」に目覚めて不条理感にさいなまれるものの、最後には「反抗」ということに思いついたり、シジフォスが幸福であったように、己の幸福を確認している。

『神話』の思想も『異邦人』で表明されている思想とほとんど同じだが、『神話』のほうには「反抗」の思想もすでに表明されている。

ランベールは、リュウやタルーに対しても脱出の計画を打ち明け、堂々と個人の幸福のために自己主張する。そんなランベールにリュウは立場上、脱出許可を出すわけにはいかないが、内心では彼の言い分を理解する。「何ものもこの世界では愛するものから隔てられるに値するものはない」¹⁷⁾というリュウのこの言葉は彼の内心を表明したものだだろう。リュウはランベールの脱出の計画を妨害するようなことはしない。

ランベールがカミュの分身だというのはこうした初期の思想との一致からもいえるが、現実面として、西永良成氏はこのようなランベールを若いころのカミュだと断定し、つぎのように述べる。

「ジャーナリストで植民地における「アラビア人の衛生状態」についてアンケートをしにやってくるランベールは、『アルジェ・レビュープリカン』の記者として「カビリア地方の悲惨」その他の、原住民に加えられた植民地主義の諸々

A. カミュの小説『ペスト』（平田）

の不正を告発する記事を多く書いた30年代後期のカミュを思わせるし、＜観念のために死を賭ける、抽象的なヒロイズム＞よりも具体的な勇気と努力を必要とする「幸福」をいくらか高慢ささえみせながら選び、ペストから逃れて恋人に再会するためには、たとえ非合法的な手段であってもいとわぬ彼は、たとえば『結婚』の作者としてのカミュ、レジスタンスに参加する前にしきりにオランに戻るよう努力したカミュとほとんど区別をつけがたい¹⁸⁾。

「オランに戻るよう努力したカミュ」とは、療養のためたまたま本国フランスの一寒村パヌリエに来て、ナチス占領軍の南部支配という政治的変化のために妻と別離状態に置かれ、妻のいるオランに戻るよう努力した現実のカミュのことである。これはカミュにおける別離と追放のテーマとしても重要な点であるが、42年8月からパヌリエに滞在し、就職運動のために先にオランに帰った妻とナチス・ドイツがアルジェリアとフランス本国との往来を遮断したため、面会が不可能になり、結局2年後の44年10月にパリで再会することができたという苦い体験の投影でもあろう。2年間カミュは新妻と別れて、一人フランス本国で暮らしたのだ。西永氏の「自己中心的なく幸福の哲学」という文言は、カミュに対してやや厳しい評価だが、現実をデフォルメした小説に話を戻せば、このような指摘は説得力がある。

ランベールはペストの街の悲惨と、現実にと戦っている人間たちを見て、「ひとりで幸福になる」ことに疑いを持ち、結局、死の危険を冒して、ペストにたいする共同の戦いに参加することを決意する。ランベールはいう。

「＜そうなんです＞と、…しかし、自分一人が幸福になるということは、恥ずべきことかも知れないんです。…僕はこれまでずっと、自分はこの街には無縁の人間だ、自分にはあたなたがたとはなんの関わりもないと、そう思っていました。ところが、現に見た通りのものを見てしまった今では、もう僕はこの街の人間です。自分でそれを望もうと望まないと、この事件はわれわれ皆んなに関係のあることなんです¹⁹⁾。レジスタンスという現実と直面してそれに参加することを決意したカミュの姿がここに見出せるだろう。

『結婚』において「幸福であることに恥じることはない」と言ったカミュが、

「一人で幸福になることは恥ずかしいことである」²⁰⁾と言わせているのは変化のしるしの一つである。

ところが東浦氏はこのランベールの変化は曖昧だと言い、「著者（カミュ）はこの選択に完全には同意 approuver していないように思える」²¹⁾からだという。「カミュは幸福と正義の狭間で引き裂かれ、ためらっていることは明瞭である」²²⁾から。しかし、この「ためらい」は愛という問題で解決される。「この小説のすべての闘士は彼らが愛を必要とし、その彼らの闘いは愛なくしては意味がなくなるだろうこと」²³⁾を知っているからである。ランベールのこの前向きの変化、闘争への変化が愛を基礎に置くという東浦氏の分析は的を射たものである。

現実のカミュがアルジェ時代からつねに弱者の立場にたち、「カビリアの悲惨」のようなルポルタージュを連載したことや「冤罪者の救済キャンペーン」記事を自ら精力的に取材をしたのもこうした愛があったからではないか。

カミュの思想、晩年の「中庸」と「節度」の思想にいたるまで、人間に対する深い愛なくしては理解されないであろう。そしてこの愛は甘ったるい愛ではなくグランにおいて見られる峻厳な愛である。小説の最後の方で、「彼（リュウ）は老人（グラン）がそうであるように愛のない世界はまるで死滅した世界のようなものである」²⁴⁾と考えるのだった。愛がなければこの世は砂漠も同然である。

【タルー】

タルーは「人は神なくして、聖者になり得るか」²⁵⁾という。この矛盾に充ちた言葉を彼が目標にしているのは、神を信じられなくなったあと、間違いを犯すことなく生きる「聖性」をタルーが体現することを示している。

タルーは思想的にも、行為者としてもリュウに近い存在であり、彼ら二人の相違は、はなはだ微妙であるが、リュウがまだ暗中模索の「反抗的人間」であるのに対して、タルーの方は人生の不条理性に目覚めたいわゆる「不条理」の反抗的人間である。

「僕には、まだ知らなければならぬことはごくわずかしかなかったね」²⁶⁾

A. カミュの小説『ペスト』(平田)

とタルーは豪語する。

パヌルーが非合理的なものを神とする宗教人であるとすれば、タルーは「神なき聖性」を目標とする理性的人間なのである。

小説『ペスト』におけるタルーの役割は二つあると考えられる。

一つは、リュウの記録を補完する記録者としてのタルーであり、もう一つは、リュウに対してなされる「告白」(身の上を語る打ち明け話)から、カミュ自身の心境を語る代弁者としての役割である。リュウとタルーは、兄弟のように同じような行動をし、ペストと闘うが、「リュウの記録を補完する記録者としてのタルー」とは、リュウの目の届かないところを丹念に自分の手帳に書きとめ、リュウの記録の幅にふくらみをもたせる役目を果たしているタルーのことである。リュウはタルーの死後、この「手帳」を発見し、この「手帳」を読んだことで、彼の記録に彼の知らなかったオランの街の細部を知り、それを書き留めることができたのだ。

タルーは、重要な場面あるいは些細な場面に立会い事細かにそこで見たものを書きとめている。例えば、パヌルー神父の二回の説教とか、オトン判事の息子の死の場面とか、グランが快癒する場面などもそうだが、一見瑣末な出来事の記録もしている。例えば、こんな風である。

「タルーは実際その手帳にランベールとともに、市立競技場に設けられた収容所を訪れたときの記録を載せている。競技場はほとんど入り口に位置し、一方は電車の通っている街路に、もう一方は市の建っている丘の麓まで広がる一帯の荒地に面している。ふだんから高いコンクリートの塀で囲まれていたので、脱走を困難にするためには、四つの出入口に哨兵を配置しただけで十分であった。同様にまたその塀は、外部の連中が、予防隔離に服させられている不幸な人々に、好奇心からうるさい思いをさせることを防止していた。その代り、この人々は、日がな一日、姿の見えぬ電車の通る音を聞かされ、そして電車と共に通り過ぎるざわめきが一層大きくなることによって、事務室の出勤と退出の時刻が来たことを察するのである。彼等はこうして、自分たちがそこから追放されている生活が、直ぐ五六メートル向うで相変らず続けられ、そしてコンク

リートの塰は、互に無縁な二つの世界——それぞれ別の遊星上にあったとしてもこれほど無縁ではあり得ないような二つの世界——を隔てていることを知るのであった²⁷⁾。これはランベールが脱走を試みようとしている場所の描写である。

さらに小説の終わりちかくなってこんな部分もある。

「実を言えば、この手帳は統計が下降しはじめた時からかなり奇妙なものになってくる。疲労のせいでもあろうか、その筆蹟は容易に判読し難くなり、また余りにも頻繁に一つの話から他の話へと移りすぎる。…例えばコタールの場合に関するかなり長文の一節の途中に、例の猫の老人についてのちょっとした記述が出て来たりする。タルーの言うところを信ずるならば、ペストもこの人物に対する彼の評価をいささかも減じることなく、ペストが始ってから、それ以前に興味を惹かれていたと同じく興味を惹かれていた人物であり、また、彼タルー自身の好意如何が原因ではないのであるが、不幸にして今後は興味を惹かれることのできなくなった人物であった。…彼はそこから奇妙な結論を引き出して、小柄な老人は気を悪くしたか、死んだかしたのであり、もし気を悪くしたとすれば、つまり老人は自分の方が正しいと考えているのであって、ペストが老人に対して不法な仕打をしたわけであるが、しかし、もし死んだものとすれば、彼についても喘息病みの爺さんの場合と同様に、彼は聖者であったのかどうかと考える必要がある、とのべている²⁸⁾。

このように一見瑣末に見える事柄を描写するのだが、小説に厚みと膨らみを持たせるのに重要な役割りを果たしているのである。しかし、瑣末な事柄ばかりを描写するわけではない。ランベールにリュウもまた彼の妻から隔てられているが、とりあえず目の前にある災難に立ち向かっていることを知らせるのもタルーである。

タルーが初稿の段階から姿を見せているということは、カミュにとって彼が重要な人物であったということは論をまつまでもないが、こうした人物をカミュが思いつき採用したのは、小説技法の一つの工夫でもあったのである。

タルーの「手帳」の役割については、サルトルがモーリヤックの『テレーズ・

A. カミュの小説『ペスト』(平田)

『デスケルー』をとりあげて²⁹⁾、作家はオールマイティのような神の立場をとることはできないと批判してから、作家が人間である以上、その視点は一つでなければならないことになり全能の神の立場はとれなくなった。それゆえ『ペスト』に限っていえば、記録者の目の届かないところの出来事を読者に開示するという役目をタルーの「手帳」は果たしており、複眼的に「記録」の幅を広げているのである。19世紀の作家も神の立場の不自然さを自覚し、書き手の視野を複眼的に広げるためにいろいろ工夫している。例えば、「私は偶然、誰その手紙ないしは日記を手にいれることができた、それによると…」といった形式で物語を語る方法を編み出していたことは周知のところである。モーパッサンが短編でこの手法を多く採用している。現代のサルトルもその名作『嘔吐』で「刊行者の緒言」Avertissement des Éditeursを小説の最初につけ過去の作家の遺産を受け継いでいることは良く知られている。

さて、タルーのもう一つの役柄である「告白」についてはどうであろうか。この「告白」はペストも終わりに近づいたある日、タルーがリュウに語る自分の歩んできた人生の軌跡についての「打ち明け話」のことである。

それによると少年の頃、タルーは父親に連れられて、ある死刑判決が下されるであろう容疑者の裁判を見学したことにより（判事である父親としては自分の「勇姿」を子供に見せ、できれば自分のあとをついで欲しいという願いがあったのだろうが）、その息子の方は被告との「人間的連帯」を感じ、「人」に死刑を宣告する社会のシステムに疑問を感じ、家出をして、いかなる場合でも人間に死をもたらす者の側に立つまいと決心し、革命に手を貸したりするが、以後「神なき聖者」un saint sans Dieuになることを生きる目標にして今日に至っているということである。この「神なき聖者」という矛盾した者になるということは、たとえ間接的しろ「合法的殺人」を認める社会に自分がいる限り、自分はいよいよペスト患者(保菌者)でなくなることはありえないことを知り、「全精神を傾けて、そのペストと闘っていると信じていた間も、自分はいよいよペスト保菌者ではなくなったことはなかった」³⁰⁾ことを悟る。

彼は死刑制度の上に安住している社会の中であって、ペスト菌（死刑の実施

を認めている社会の罪悪というように、タルーの告白の中のペストは意味を拗げられている)をふりまくペスト保菌者になることを拒否する。何びとといえども絶対的無実を主張することはできないというのがタルーの主張である。だからタルーは、今のところ「罪なき殺害者たらんことに努め…災害を限定するために、あらゆる場合に犠牲者の側」³¹⁾にくみする者というように、注意深く限定されているのである。

死刑の問題は『異邦人』にもすでに出ており、ここでは、父親がみた死刑のエピソードとして語られ、これは実際に処刑の現場を見た父親が帰宅して、気分が悪くなり食べた「朝食の一部を吐いた」という話である。このエピソードはカミュの伝記的事実であり、実際にカミュはこのような話を母親から聞き、後の死刑廃止論にいたるまで採用される話である。ムルソーは、死刑宣告を受けたのち死刑制度あるいはそのシステムなどについていろいろ思いをめぐらしている。死(自然死および死刑)の問題はカミュの終生の問題であった。

早くもフィリップ・ソディは1961年に「タルーの告白によって提起された死刑への攻撃は、カミュが1945年くらいもっとも考慮してきた政治問題と密接に関連したものであり、さらにこの小説の諸々の思想についてなされた抗議の大半を解消させてしまうものである」³²⁾という指摘をしている。タルーの告白(うち明け話)が、現実のカミュの政治的体験(レジスタンス活動及び対独協力者に対する粛清に賛成の意を表明した問題)の投影であり、カミュに対してなされた抗議への解答であるという趣旨の指摘はその後多くの研究者においてなされている。例えば、年代順に言えば、ついで1962年のロジェ・キーヨ³³⁾、1972年の西永氏³⁴⁾、1977年のジャン・ガサン³⁵⁾など。

しかしタルーの「告白」がカミュの政治的思想(人生モラル)のかなり明瞭な代弁だという見解を一層明確にしたのは西永氏ではないかと思われる。

西永氏はその論文「カミュと対独協力派粛清問題」において「この小説におけるタルーという人物のロマネスクな均衡を破壊してまで、作者の罪の意識のやむにやまれぬ告白の衝動に身を任せているということが分かるだろう」³⁶⁾と述べている。「小説のロマネスクな要素」を崩してもカミュが突然登場人物に

A. カミュの小説『ペスト』(平田)

心のうちの心情を吐露させることは、すでに『異邦人』の教誨師の説得に対してムルソーが激情的に反発する場面があったことは周知のところである。

「ロマネスクな均衡を破壊する」とは作者自身の現実の体験が、あまりにも「生々しい告白」の形で出ているということと、彼の出自はわかるものの、彼がなんのためにオランにやってきて、ホテル住まいをし、何をしようとしていたのかというあたりが不明瞭であり、ただ彼の「告白」をするために、無理やりに小説の中へはめ込まれたという印象がぬぐえないということだろう。タルーという人物の出自はその告白から分かるが、何のためにオランに来て、保健隊を組織しリューに協力することになるのかそのロマネスクの必然性があまり明確ではないのは確かだ。

しかし、タルーは、ペストの最後の犠牲者として「断罪」され小説から退けられる——タルーの死。タルーの死については松本氏が緻密で実証的な研究をしていて³⁷⁾、その要因は幾つかあることを示唆している。タルーの死——小説の終了する少し前、つまり市門が開放される直前の死は我々にはやや唐突な感じをうけるが、それはタルーの生き方そのものの中に求められねばならないと考えられる。この「事件」は、タルーのモラルが、前述したように「神なき聖者」たらんとしたことによるものである。「神なき聖者」というのは、カリギュラが月を手に入れたという不可能な願望を抱き、暴虐極まりない行いをし、ついには家来たちの謀反で虐殺されたように、一つの絶対を求め、それのみに邁進した結果だと考えるのは自然ではなかろうか。タルーは保健隊を組織し、先頭にたってペストに立ち向かうが、ポル・ガイヤールの言うように、「ペストの期間中は、ヒロイズム、完璧な純粹、神なき聖性は簡単だった。要するに、生命を賭して、世話するだけで充分だった」³⁸⁾のである。ペストが終息すればタルーは無用の人となる。現実のカミュは1945年以降のモーリヤックとの論争から、何度もいうように肅清のありかたにおいて自分の行き過ぎを認めざるを得ない状況になり公衆の前で自分の非を認めた。論理を極限にまで進め、一つの方向に走った者の「死」である。タルーは現実のこのカミュの挫折を背負わされた人物だったのである。

タルーは市門が開放される前にペストらしき症状を見せ、リユーの母親の介護もむなしく死ぬ。カミュがモーリヤックとの論争から結果する弁解的な「告白」をタルーに託したとすることを認めれば、小説におけるタルーの死はやむを得ない処置だったのだ。

しかし、松本氏のいうように「タルーは決して否定的に描かれた」人物ではない。「二人の目指さず方向は一致していた」³⁹⁾のであるし、カミュもレジスタンスの闘士として、重要な役割を果たしたのであるから。そしてモーリヤックとの論争からの挫折、この挫折から生命主義ともいえる「目的は手段を許さない」というカミュ後半の最も重要な思想が導き出されるというのは、逆説的に大きな収穫だったように思われる。

【パヌルー神父】

タルーが理性を象徴する人物であるとすれば、パヌルー神父は神の見解を述べる人物である。小説『ペスト』において、ペストの猛威が上昇線をたどり、オランの市民を脅かしている頃、碩学の士パヌルー神父は人を集めて、大雨の日に会堂で第一回目の演説を行う（ちなみに、後述する彼の第二回目の演説は大風の日に行なわれる）。

ペストの猖獗とともに、気候は夏になり、オランの街を灼熱に包むのであるが、パヌルー神父の出現には嵐が伴うのである。パヌルー神父はペストの災禍の中に神罰を見、ペストは我々人間にくだされた試練であるとカラサオ fléau <麦や米をその殻と分離するためその穂を打ちたたき昔の農具の意味がある>のたとえをもち出し、人々の改心を求める。「皆さん、あなた方は渦の中にいます。皆さん、あなた方はそうなるにふさわしかったのです」⁴⁰⁾。ここにはムルソーに銀の十字架を振りかざして威圧した判事の神、または教戒師の神と似たような神が見られはしないか。

今、パヌルー神父の言う神は人の上に君臨し、人に対して足下にひれ伏すことを要求する神なのである。

パヌルー神父の演説は続く。「すべて歴史のはじめから、神の災禍は心おご

A. カミュの小説『ペスト』(平田)

れる者どもと盲いたる者どもを、その足下にひざまづかせたのであります。よくこのことを考えひざまづいていただきたい。…それが神のあなた方を愛し給う愛し方であり、本当のことを言えば、これこそ唯一の愛し方なのであります」⁴¹⁾。このように自己の信仰にパヌルー神父は忠実な生き方を貫く。パヌルー神父は、タルーの組織した保健隊に加わってペスト患者の看護にあたっていたある日、オトン判事の息子が同じくペストに侵されて死ぬのを目のあたりにして、内面的に重大な危機を迎える。

なぜなら「放蕩者が雷に打たれることは正当であるとしても、子供が苦しむということは納得できない」⁴²⁾ ことだからである。

パヌルー神父の信仰が揺らいだように見えるのは、『反抗的人間』の中で叙述された「形而上的反抗」の項の論述とこの場面が対応していることに気付くであろう。すなわち、「神の創造に悪が必要だとすれば、そんな創造を受け入れることはできない」⁴³⁾ とカミュは言う。「子供の苦しみが、真理獲得に必要な苦しみの一部になるとすれば、私は今後真理はそれに値しないと断言する」⁴⁴⁾ と、カミュはイワン・カラマゾフの言葉をさらに引用するに及んでいる。

前述したように、パヌルー神父は大風の日には第二回目の演説を行うが、彼の内面の変化は覆いようもない。

今度は、神父は「あなた方」とは言わずに「私どもは」と言う⁴⁵⁾ のである。そして前回の説教について、「彼はそのことを慈悲の心なく考え、そして言ったのであった」⁴⁶⁾ ことを認める。

ピエール＝アンリ・シモンは言う。「罪なき者の苦痛、死の苦しみが絶対の悪であり、正義に対する侮辱であることをどうして否定し得ようか。その時には、神を認めるか、あるいは信仰をもつ場合には、神と悪とを同時に肯定し、パラドックスを受け入れ、自らの信仰を悲劇的に生きるかしなければならない」⁴⁷⁾ のである。パヌルー神父は信仰の「絶対的非合理性」に同意するものである。「神への愛は困難な愛であります。それは自我の全面的な放棄と、わが身の蔑視を前提としております。しかし、この愛のみが子供の苦しみと死を消し去ることができるのであり、この愛のみがともかくそれを必要なもの——理

解することが不可能であるがゆえに、そしてただ人がそれを望む以外にはなし得ないがゆえに必要なもの——となし得るのであります」と⁴⁸⁾。さらにシモンは次のように言っている。「宗教的体験によって生きられた現実の中において、オプティミズムと絶望との間の選択よりは二つの声、すなわち父である神の慈悲を信頼する声と、神の子であるキリストの情熱にくみする声との間において、維持すべき均衡の方が問題のように思われる」⁴⁹⁾。

しかし、パヌルー神父の内面が揺らいでいるように描かれる。このパヌルー神父の揺らぎは、『異邦人』の教誨師の「涙」に通じるものがあり、パヌルー神父も信仰者の権化でなく人間的な側面を垣間見せる。このことはカミュのキリスト教理解の度合いを示すものであろう。最後にパヌルー神父はペストとは、はっきり語られてはいないが、それらしい多くの兆候をもった病気にかかり、自分自身の信仰を固執し、医者の治療を拒否して死ぬのである。——パヌルー神父の死。パヌルー神父もタルーと同様、作者によって「断罪」され市門開放の前に死の運命を余儀なくされる。

『神話』の「哲学的自殺」の項は哲学史的には議論のあるところだろうが、カミュは、シェストフやキルケゴールやヤスパースなどは等しく不条理を認めながらも、一切をよりいっそう根本的に説明しようとして、不条理を忘れ、そこに超越者の存在をもちだして、希望にすがりつく。これは明らかに論理的に矛盾しており、そこには「飛躍」があるとカミュは言って彼らを批判する。パヌルー神父のこの第二回目の説教は、カミュによって退けられたキリスト教の実存主義を表明するものではないか。

パヌルー神父は最後まで信仰を捨てることを良しとせず、絶対的信仰者として死を向かえる。このケースもやはり絶対に走った結果パヌルー神父を「消す」必要があったのではなかろうか。カミュの理解している神とは、「矛盾撞着こそが神の偉大さなのであり、非人間性こそ神の証明」⁵⁰⁾となるような神なのである。

パヌルー神父は次のように言わないだろうか。「それは反抗したくなるようなことです。しかし、それはつまりそれが我々の尺度を超えたことだからです。

A. カミュの小説『ペスト』(平田)

おそらく我々は自分たちに理解できないことを愛さなければならないのです⁵¹⁾。

最後に、パヌルーが小説から退けられる——(パヌルーの死)——のは『神話』で叙述された「飛躍」の過ちを犯したことに他ならないであろう。

カミュの立場の困難は、「彼が世界の不条理を主張することから出発しただけに、それだけいっそう明瞭である。一般に、非宗教的ヒューマニストは世界のある秩序の存在を信じている⁵²⁾」とシモンは言う。カミュは「不条理」と「反抗」の秩序を信じているのだ。

カミュとキリスト教という問題はかなり微妙で複雑な問題がからんでくる。簡単にカミュは無信仰だったでは済まされない部分がある。

まず1936年にアルジェ大学に提出し、認められた卒業論文が「キリスト教形而上学と新プラトン主義」というタイトルのものでプロティノスと聖アウグスティヌスについて論じたものである。学術論文の体裁で書かれたものなので、『結婚』や『裏と表』、『異邦人』、『神話』などと較べるとつやのない文章で書かれているが、簡単に要約すると、ヘレニズムとキリスト教との関係、つまりキリスト教的思想の中で新プラトン主義が占める位置を研究したものである。

カミュが若いときに、汎神論的自然観を持っていたギリシャにあこがれていたことは良く知られたところである。ギリシャを含め地中海文化を広めたいという青年の願望を持っていたことは周知のところである。1937年、24歳の時にアルジェの「文化の家」で「土着文化あるいは新しい地中海文化⁵³⁾」と題し演説を行い、地方文化の振興を訴え地中海民族主義文化を提唱している。

「プロティノスは官能的な仕方で知性を描写する」といったプロティノスの思想に対する共感とキリスト教教父のアウグスティヌスを取り上げ論じていることは、二人ともアフリカ(北アフリカ)出身だったことがその動機だったようでもあるが、二人に対して思想的親近感をもっていたことは充分推測される。

カミュとキリスト教関係を示す文言を拾ってみるといくつか、キーワードになるようなものがある。

「もしも君が<僕にはキリスト教がわからない。慰籍なしで生きたいと思う>

と言え、君は偏狭で不公平な人間ということになる。ところでもしも、慰藉なくして生きている君が、＜僕にはキリスト教的態度がわかり、それに感心している＞と言え、君は軽薄なディレクタントということになる⁵⁴⁾。これは『カルネ I』のものであるが、『異邦人』において、前述したように教誨師がムルソーを改心させ、信仰を説く場面で、ムルソーは自分の信条を激烈な調子で教誨師にぶっつけるが、司祭は説得不可能と理解したとき、目に涙をうかべる。このちょっとした描写で、教誨師にカトリック教会の「傀儡」ではなく一個の人間としての価値を与えている。

1940年3月の『カルネ I』のメモに「ずっと前に、キリスト教が僕たちを感動させたのは、人となったその神によってだ⁵⁵⁾」という文言もある。

1942年の3月頃と思われる『カルネ II』に「私の世界の秘密、それは人間の不死性 *immortalité* を考えずに神を想像することだ⁵⁶⁾」というメモ書きがある。

1943年に「南方手帳」という雑誌の依頼でジャン・ギットン著の『ブージェ氏の肖像』の書評を「選ばれた者の肖像⁵⁷⁾」と題して寄稿する。(前年に『異邦人』と『シジフォスの神話』を刊行し、カミュは有名人になっていた)。なお、ブージェ氏については「選ばれた者の肖像」のなかでカミュ自身簡単な紹介をしていることを言い添えておく。著者のギットンについては、『プチ・ロベール 人名事典』によると、『プロティノスと聖アウグスティヌスにおける時間と永遠』(1933年)、及び『パスカルとライプニッツ』(1950年)などの著書を刊行しているフランスの哲学者<1901年—1999年>である。この書名から見てカミュとの関心が共通していることが窺がえる。「選ばれた者の肖像」のなかでカミュは次のように言っている。「実際、この百年来、信仰が扱うべきことと、科学が扱うべきこととが、あまりにも混同されてきた。より柔軟な検討こそが、かえって、キリスト教信者にも、全うき自由をとり戻してくれるのである⁵⁸⁾」とキリスト教信者にも理解を示していると言えないだろうか。

『神話』において、「神の偉大さとは、それが矛盾撞着していることであり、非人間性こそ神の証明なのだ」と反発を示すかと思えば、不条理感の発生は、理性を働かせて世界を理解しようとしても、世界は人間のこの願望、あるいは

A. カミュの小説『ペスト』(平田)

欲望に背理的な沈黙を守り明快な解答を得られないところから生まれるということを確認しておく必要があるだろう。理性で割り切れないところに不条理が発生するならば、不条理と宗教との違いは紙一重だとも言える。

1946年12月にラトゥール＝モーブール街のドミニコ修道会での演説でモーリヤックとの論争において自分の非を認めたその会場は、レジスタンス時代にリヨンで知り合い、以後友情をかわした人物であるブリュックベルジェ Bruckberger 神父が紹介してくれたものだった(パヌルー神父のモデルはこの人ではなかったかと推測される)。

この演説からもキリスト教との微妙な距離を保っていることを窺わせるいくつかの文言が拾える。

「まず私は世俗的パリサイ主義というものに負けないよう努めよう」と述べたあと、「第二に、更に私は、いかなる絶対的真理もいかなる使命ももっているとは感じないゆえに、私は決してキリスト教の真理は迷妄だといった原理から出発せず、ただ私がそこに入れなかったという事実から出発するだろう、ということを書きたい。…私は悪についての同じ恐怖をあなたがたと共にしている。しかし、私はあなたがたと希望を共にしないし、子供たちが苦しみ死ぬこの世界に対して闘いつづけるだろう」⁵⁹⁾。カミュは聖性なるものにかなり惹かれるものはあったが、信仰を持つことなく死んだ。カミュは1959年に Jean-Claude Brisville のインタビューの答えで「私は聖なるものに対する感情はあるが、未来の生は信じていない。それだけのことだ」⁶⁰⁾と述べている。

パヌルーは子供の死を間近に見て信仰がゆらいだように見えるが、結局信仰を最後まで捨てることがなかった。オランの市門が開放される以前にパヌルーは死ぬ。これはやはり宗教を絶対的なものとした者へのカミュの意図だったように思える。

【リユール】

さて、タルーが分析して言うように、「第三の範疇」がなくてはならないだろう。つまり「真の医者」がそれである。小説から引き出せる意義をいっそう

明らかなものにするために、今度はパヌルー神父と医師リユーを対比してみることが必要になってくる。

パヌルーの説教（第一回目）についてどう考えているかと問われて、リユーは次のように答えている。「私は、病院の中ばかりで暮してきたので、集団的懲罰などという観念はあまり好きになれませんね」⁶¹⁾。パヌルーは来世を信じ、現世を否定する人であり、従って観念的である。それに対して、リユーが医者であるということは、人間の悲惨に直接かかわりをもつ現場の人ということであり、従って現実的である。リユーの強さの源泉はここにある。パヌルーが「おそらく我々は自分たちに理解できないことを愛さねばならないのです」⁶²⁾と言うとき、パヌルーとリユーの相違は決定的なものになる。

「私は愛というものについてもっと違った考えをもっています。そして私は死ぬまで子供達が苦しめられているこんな世界を愛することを拒絶するでしょう」と、リユーは「情熱を込めて」言う⁶³⁾。

パヌルーが「人間の救済」のために働くというのに対して、リユーは「人間の健康」がまず第一だと言う。

要するに、パヌルーが人間を超えて、永遠的、絶対的なものを志向するのに対して、リユーには、相対的、限定的な方法であっても、そのような仕方で人間に奉仕することが問題なのだ。それはつねに一時的な勝利しかもたらさないものであっても、そうすることが彼の「誠実」というモラルに適うものなのである。

「私が言い得る一切は、実際これは私の尺度を超えているということだけである。ここから私が否定を引き出しはしないとしても、少なくとも不可解なものの上に何一つ築き上げようと思わない」⁶⁴⁾と、『神話』においてすでにカミュは述べている。

小説の最後になって、医師リユーは、自分がこの小説の記録者であったことを告げる。すべてがリユーに集約されており、そしてそれはほとんどカミュ自身でさえある。

タルーがモーリヤックとの論争において反省を余儀なくされたカミュの分身

A. カミュの小説『ペスト』(平田)

であるとすれば、医師リュウは「犠牲者も否、死刑執行人も否」において「身体を救うこと」と題してイデオロギーや歴史をつくることといった大それたことは考えず、「身体を救うこと」という「一段と弱いユートピア」かもしれないが、「未来に可能性を残すために少なくとも身体を救おうと思うことはできる——これが私の確信である」⁶⁵⁾ と言い放ったカミュと正確に一致していることがわかるだろう。

ところで、カミュは1952年6月30日に『現代』誌 *Les Temps modernes* 宛ての手紙で、「『ペスト』は一つの告白です。そして物語が間接的なものであればあるだけ、より一層物語が全的であるようにすべてが計算されているのです」⁶⁶⁾ と述べている。

リュウについては、とりわけ左翼的知識人がそこに反歴史的な路線を嗅ぎつけたことは前述した。しかし、時代が下って21世紀の現代からみると、「反歴史主義」という批判はイデオロギー的な匂いがする。現代社会にはまだカミュが希求したような平和な社会とは、お世辞にも言えない厳しい現実がある。しかし、資本主義はまだ健在で、弱者救済といったような社会主義的方法論は今後も生かして行かねばならないが、*communisme* と言ったイデオロギーはもう過去のものであろう。

ペストが終息したからと言って、これでペスト＝悪はすべて終焉したと楽観するのではなく、またいつなんどきペスト＝悪は地上に現れ、猛威を振るうかもしれないと、ペスト＝悪に対して心的・物理的な備えをしておく必要を痛感し、「黙して語らぬ人々の仲間に、これからペストに襲われた人々に有利な証言を行うために、彼らに対して行われた非道と暴虐のせめて思い出だけでも残しておくために、そして、天災のさなかで教えられること、すなわち人間のなかには軽蔑すべきものよりも賛美すべきものの方が多くあるということ、ただそうであるとだけ言うために」⁶⁷⁾ 人道的とでも言える態度を持すリュウに刊行直後にこの書に称賛を送った一般読者の受容が正しかったように思える。

リュウの態度は、カミュが『反抗的人間』において定義づけようとしたある思想（「正午の思想」）を擁護するものである。「英雄主義よりもむしろ善意を、

至福よりもむしろ健康を、高德よりもむしろ人類愛⁶⁸⁾をリュウは求めているのである。「人がつねに欲し、そして時には手に入れることができるものがあるとすれば、それはすなわち人間の愛情であることを彼らは知っている⁶⁹⁾と、記録者リュウは書き留めている。

「身体を救うこと」・「中庸と節度」の思想と言っても、カミュは決して歴史や政治に対して無関心な傍観者ではなかった。56年のハンガリー動乱に対しても、いち早く発言したし、ソ連の強制収容所の問題が明るみにでた時も歯にきぬ着せぬ態度を示したことを見ればわかるだろう。リュウの態度は、慎ましやかだが「目的は手段を選ばず」ではなくまず、「身体を救うこと」からはじめるというところに、隠されたエネルギーがある。

「共感」というものを通じて、人間に対する愛情を実現しようとする医者は、だから人間の肉体だけを癒す医者ではない。

妻に去って行かれたことでこの世の不条理を強いられる老吏グランに対する、リュウのやさしく人間的な触れ合いを見ればこのことは明らかであろう。

「<ああ、全く、先生！>と彼は言った。リュウは口がきけずに、頭を振ってうなずいた。この悲嘆は彼の悲嘆であり、このとき彼の心臓をかきむしったものは、万人がともにする苦痛を前にしたときの人間の心に生まれる果てしない怒りであった。<そうだ。グラン君>⁷⁰⁾。

最後のところで、医師リュウは「人々は相変わらず同じようだった。しかし、それが彼らの強み、彼らの罪のなさであり、そしてその点においてこそ、あらゆる苦悩を超えて、リュウは自分が彼らと一つになることを感じるのであった⁷¹⁾と。これが人間の正義を代表しているとも言えるリュウの人間としての立場なのであり、一度対独協力派問題で「不正議」という奈落の底に落ち込み、再び這い上がって来たモラリストカミュの立場でもある。

結局、小説『ペスト』の意義は、パヌルーのように、非合理的なものの中に「飛躍」することもなく、またタルーのように「神なき聖性」を実現しようとするものでもなく、たとえその闘いが、泥くさく、見通しのきかないものであっても、あくまでも人間の立場に踏みとどまり、人間の幸福に奉仕するものが

A. カミュの小説『ペスト』(平田)

勝利を得るということであろう。「『ペスト』は、20世紀の政治闘争の中であって、静寂主義 quietism に対してではなく、中庸 moderation に対してなされた一つの訴えである」⁷²⁾とソディは力説している。

リュウ自身記録者として、「世に何びとといえども、たとえそれを信じていると信じているパヌルーといえども、このような種類の神(全能の神<筆者注)を信じてはいないのであって、その証拠には何びとも完全に自分をうち任せてしまうということはないし、そして少なくともこの点においては、彼リュウも、あるがままの被造世界と闘うことによって真理の路上にあると信じて」⁷³⁾いるのである。さらに続けてリュウは言っている。「とにかく、世界の秩序が、死によって律せられている以上は、おそらく神にとって、人々が自分を信じてくれない方がいいかも知れないんです。そして、あらん限りの力で死と闘った方がいいんです。神が黙している天上の世界に目を向けたりしないで」⁷⁴⁾。こう訴えるリュウは、『結婚』や『異邦人』、『神話』の世界に戻ったとみることもできるだろう。「不条理」と「反抗」はものの表裏であり、まさにカミュ的世界である。

『ペスト』はまさに、神の助力なしで闘われ、勝利を得た物語なのである。

さて、このような書を上梓したカミュの現実の態度はどうであったか。1946年2月に行われたラトゥール・モブールのドミニク教団修道院における信仰問答で、彼はキリスト教徒になることを拒否する言明を行っていることは先でも見た通りである。

カミュはこの中で希望という言葉を使っているが、彼の希望という言葉は普通の使い方と少し異なっている⁷⁵⁾。続いて、La Reine du Caire 誌の記者エミール・シモンの質問に答えてカミュは次のようにも言っている。「信仰は平和であるよりはむしろ悲劇的希望だという印象を私はもっております」⁷⁶⁾。

『神話』において「希望」はいわゆるパンドラの箱的希望ではなく、現世を否定するものであったことが思い出される。

ソディはまた次のようにも言っている。「タルーとリュウのペストに対する

闘いは——小説ではしばしば《抽象》との闘いとして言及されている——マルクス＝ヘーゲルの歴史理論が持つ抽象的論理と、あらゆる全体主義(強調筆者)に対するカミュ自身の闘いでもある。またリュウの態度はカミュが定義づけようとした《穏健な政治思想に一致する》それを政治的な用語に移しかえると寛容と自由主義に対する訴えでありポッパーの《段階的社会政策》に賛成し、社会の完全な再編成をとまなうレーニンの暴力革命思想に対する論証といえる。カミュの見解に従えば、革命はあまりにも高くつきすぎるのだ。彼らの志す思想がいかに高潔なものであろうとも、彼らがその社会改善の中で創造するもの以上に、人間の生命を犠牲にしてしまうのだ。〈善意も、もしそれらが教化されることがなければ、悪と同じだけ害をおよぼしてしまう〉、とリュウは考える。この点において彼はカミュ自身の思想の全き代弁者となる⁷⁷⁾。

要するに、カミュの反キリスト教的・反共産主義的な態度は、 Kommunismus とキリスト教の間に、より人間的な道を模索する一つの試みの確認なのだ。我々は位置づけたい。この点でカミュはフランス的モラリストの地位を獲得していると言って過言ではないだろう。

【脇役的人物】

司法関係の権威であったオトン判事は、犯罪者を見張り裁く立場の人物だが、息子の死以来人がかわったように保健隊の仕事に献身的に協力する。しかし彼は市門が開放されるまでに死ぬ。人に死刑を言い渡すことのできる人間はペストから生き延びることはできないのだ。対独協力者を髭髯とさせるコタールは一人ペストの到来を喜び、ペストのなかで自由に振舞うが、市門が開放されると再び迫害されるという恐怖に襲われ気が狂い、窓から群集に向けて発砲する。彼は逮捕され連行されて行く。このように脇役的な人物が配置されているが、脇役的人物で注目すべき人物は先述した役所の平職員で、趣味として小説をかくことを夢め見、実際にペンをとるものの最初の数行を何度も書き直し、先へ進むことができないジョゼフ・グランである。

A. カミュの小説『ペスト』（平田）

ソディはこのグランについて、「地方の役所につとめる書記ジョゼフ・グランはある意味においてこの小説の真の主人公として叙述される」⁷⁸⁾という。

さらに少しあとで「この小説の真の主人公として描かれているのはリューではなく、カミュが反抗の真の姿であると述べて尊敬した、慎み深い謙虚な態度をもって活動に参加するジョゼフ・グランである」⁷⁹⁾とまでいう。東浦氏もグランを主人公の一人として、一項目設けている。グランに対するカミュの共感は見落としがちだが、カミュの彼にたいする愛情は次の場面を思いだせば納得されるであろう。

正午の冷え冷えとする時刻に、リューは車から出ると、遠くに、粗末な木彫りの玩具のいっぱい並んでいるショーウィンドーに殆ど貼りつくようにしている、グランの姿を見た。老吏の顔には、涙がとめどもなく流れていた。そして、その涙がリューの心を完全に掻き乱した。なぜなら、彼にはその涙の理由がわかり、そして自分もまた咽喉元のあたりにそれがこみ上げて来るのを感じたからである。彼もまた、クリスマスの日のある店の前でのこの不幸な男の婚約のこと、そして男の方へ倒れかかりながら、自分は嬉しいと言ったジャンヌ（グランの別れた妻）のことを、思い出していた。遠い年月の奥から、この錯乱のまさにただなかに、ジャンヌの若々しい声がグランの耳に甦ってきたのだ——それはもう確かなことだった。リューは、泣いている老人が今この瞬間に何を考えているか知っていたし、彼も老人と同様にそう考えながら、愛のない世界はさながら死滅した世界であり、いつかは必ず牢獄や仕事や勇猛心にもうんざりして、一人の人間の面影と、愛情に嬉々としている心とを求める時が来る、ということを考えていたのである。

しかし、相手はガラスに映ったリューの姿に気がついた。そして相変わらず泣き続けながら、こちらを向いてショーウィンドーに背をもたせ、リューが近づいて来るのを眺めた。

「ああ、まったく、先生！ああ、まったく！」と、彼は呟いた。

リューは口がきけないで、頭を振って頷いた。その悲嘆は彼の悲嘆であり、

この時彼の心臓を搔きむしっていたものは、すべての人間が共にしている苦痛
に対する時、人間の心に生じる果てしない憤りであった。

「まったくだ、グラン君」と彼は言った⁸⁰⁾。

感動的な場面描写である。この作品が主に評価され44歳という若さでカミュが
ノーベル文学賞を受けたことは周知のところである。

注

- 1) 『カルネ』と原語そのままをカナ書きにしたが『手帳』の意味である。なお邦訳は『カルネ I』が高島正明訳『太陽の讃歌』（新潮社）で、『カルネ II』の方は高島正明訳『反抗の論理』（新潮社）である。
- 2) これは後の『誤解』になる最初に考えられた戯曲の題名である。Albert Camus : *Carnets I*. Gallimard. 1962. p.229参照
- 3) Ibid. pp.229-231
- 4) Albert Camus : *Carnets II*. Gallimard. 1962. p.36
- 5) Pléiade *Théâtre Récits Nouvelles*. Gallimard. p.1965<以下、PL Iと略す。なお、旧 *Pléiade Essais* は、PL IIと略す。)
- 6) ルネ・レイノーは詩人であり、リヨンでのレジスタンスの重要メンバーの一人であり、ドイツ軍がリヨンを撤退する直前の1994年6月にゲシュタポによって逮捕され処刑された。カミュは彼に対して並々ならぬ友情を感じていた。
- 7) 松本陽正：広島女学院大学『論集』通巻30号 p.100
- 8) Simone de Beauvoir : *La Force des Choses*. Gallimard. 1963. p.144
- 9) Roland Barthes : *Œuvres Complètes*, t. I. p.453-457
- 10) P.-H.Simon : *L'Homme en Procès*, *Petite Bibliothèque Payot*, p.120
- 11) Philip Thody : *Albert Camus, 1913-60*. Hamish Hamilton. 1961. p.94
- 12) Robert de Luppé : *Albert Camus, Classiques de XXe siècle*, p.58
- 13) 『関西大学文学論集』第55巻第3号 2005/12
- 14) Albert Camus : *La Peste*. Gallimard. 1947. p.227
- 15) Albert Camus : *Noces*. Gallimard. 1950. p.22
- 16) Albert Camus : *L'Etranger*. Gallimard. 1942. pp.171-172
- 17) Albert Camus : *La Peste*. op.cit. p.228
- 18) 『評伝 アルベール・カミュ』 p.153
- 19) Albert Camus : *La Peste*. op.cit. pp.227-228
- 20) Ibid. pp.227-228

A. カミュの小説『ペスト』（平田）

- 21) Hiroki Toura: *La Quête et les Expressions du Bohneur dans l'Œuvres d'Albert Camus*. Eurédit. 2004. p.275
- 22) Ibid. p.275
- 23) Ibid. p.276
- 24) Albert Camus : *La Peste*. op.cit. p.282
- 25) Ibid. p.276
- 26) Ibid. p.146)
- 27) Ibid. 1947. p.259
- 28) Ibid. pp.296-197
- 29) サルトル『シチュアション I』「モーリヤック氏と自由」（1939年）を参照。翻訳書（人文書院）p.35。= Jean-Paul Sartre: SITUATIONS, I .1947年版. pp-41-42「モーリヤック氏がたまたま一回だけ詩的なものの誘惑に負けたと思っはならない。はじめは作中人物と一体となり、やがて突然これを振り捨てて、裁判官のようにこれを外部から考察するこの方法は、氏の芸術の特徴なのである。氏は、最初のページから、テレーズの観点に立って物語ろうとしているように思わせる。事実、我々の眼とテレーズの部屋、そのお手伝い女性、通りから聞こえてくる物音との間に、我々はすぐに他の意識の半透明な壁を感じる。だが数ページ先にいくと、まだテレーズの心中にいるつもりなのに、我々は早くもテレーズを離れてしまい、モーリヤック氏とともに外にいてテレーズの顔を眺めているのである。」要するに、A とう人物の内面も外面も知っていて、同時に B という人物の内面や外面を描くことは人間にはできないのだ、ということである。
- 30) Albert Camus : *La Peste*, op.cit. p.272
- 31) Ibid. p.275
- 32) Philip Thody : *Albert Camus, 1913-60*. op.cit. p.103
- 33) PL I p.2000
- 34) 雑誌『パイディア』1972年 9 月号
- 35) Jean Gssin : (De Tarrou à Camus: Le Symbolisme de la guillotine 《Albert Camus 8, Lettres Modernes p.87》)
- 36) 雑誌『パイディア』（1972年 9 月号）p.197
- 37) 松本陽正：広島女学院大学 『論集』 通巻第30集
- 38) Pol Gaillard : *La Peste Camus*. Hatier. p.51
- 39) 松本陽正：広島女学院大学 『論集』 通巻第30集 p.99
- 40) Albert Camus : *La Peste*, op.cit. p.110
- 41) Ibid. p.110
- 42) Ibid. p.244
- 43) Albert Camus : *L'Homme révolté*, Gallimard. 1951. p.77
- 44) Ibid. p.77
- 45) Albert Camus : *La Peste*, op.cit. p.234

- 46) Ibid.p.234
- 47) P.-H.Simon : *L'Homme en Procés*, op.cit. Payot, p.119
- 48) Albert Camus : *La Peste*, op.cit. p.248
- 49) P.- H. Simon, *L'Homme en Procés*, op.cit. p.120
- 50) Albert Camus : *Le Mythe de Sisyphe*, Gallimard, 1943. p.53
- 51) Albert Camus : *La Peste*, op.cit. p.238
- 52) P.- H. Simon : *L'Homme en Procés*, op.cit. p.114
- 53) PL II p.1321
- 54) Albert Camus : *Carnets I* op.cit. p.72)
- 55) Ibid. p.206
- 56) Albert Camus : *Carnets II* . op.cit. p.21
- 57) PL II .p.1597
- 58) Ibid. p.1602
- 59) Albert Camus: *Œuvres complètes II*. Gallimard. 2006. pp.470-471
- 60) Jean-Claude Brisville: *CAMUS*, La Bibliothèque idéal. Gallimard. 1959. p.260
- 61) Albert Camus : *La Peste*, op.cit. p.142
- 62) Ibid. p.238
- 63) Ibid. p.238
- 64) Albert Camus : *Le Mythe de Sisyphe*, op.cit. p.59
- 65) Albert Camus: *Œuvres complètes II*. op.cit. p.440
- 66) この文章はもとより『現代』誌に1952年8月に掲載されたものである。そしてこの文章はそのまま『時事論集II』*Actuelles II*の中に「反抗と隷属」と題して再録され<1953年>, さらに1965年版のPL II. (p.758) に収録されていたものである。カミュがジャンソンから批判され, 『現代』誌の「編集長宛」に書いた反論文では「間接的な indirect もの」とカミュが書いたのは, この小説が三人称で書かれたものであって, 従って一人称のものより「間接的」という文脈で書いたものである。ところが *Actuelles II* も *PL II* もこここのところを indiscret と誤植し, カミュの当初の意図が非常に誤って解釈されていることは重大である。西永氏はこここのところを「不謹慎」と訳し, カミュの思想をこのキーワードを根拠にして解釈している。これは indiscret と誤植した出版社に責任があり, 西永氏の責任ではないが, 単なる単語の訳し間違いから生じる不鮮明な文になったというのとはちょっとレベルの違う問題で Gallimard 社の誤植は罪深い)
- 67) Albert Camus : *La Peste*. op.cit. p.331
- 68) Roger Quilliot : *La Mer et les Prisons*, Gallimard, p.181
- 69) Albert Camus : *La Peste*, op.cit. p.322
- 70) Ibid. p.282
- 71) Ibid. p.282
- 72) Philippe Thody, *Albert Camus 1913-1960*, op.cit. p.107.

A. カミュの小説『ペスト』（平田）

- 73) Albert Camus : *La Peste*, op.cit. pp.143-144)
- 74) Ibid. p.145
- 75) 希望という語をカミュは少し特殊に使っている。明日に希望をつなくことは、現在をおろそかにすることにつながり、それは現在における思想・行動の自殺を意味するものとなるのである。現在における絶望とほとんど同意語として使われていることもある。
- 76) Albert Camus : *La Peste*, op.cit. p.225
- 77) Philip Sody : *Albert Camus, 1913-60*. op.cit. p.106
- 78) Ibid. p.96
- 79) Ibid. p.97
- 80) Albert Camus : *La Peste*. op.cit. pp.282-283 引用の後半部分は引用文注(71)と同一の箇所であるがあえて引用した。